

教育部門 受賞者

萱間 真美

国立研究開発法人国立国際医療研究センター 国立看護大学校 大学校長

“支援をする人をケアする”ことで 最前線で対峙する看護職を支える



萱間 真美
Mami Kayama

国立研究開発法人
国立国際医療
研究センター
国立看護大学校
大学校長

1986年に聖路加看護大学卒業。長谷川病院で精神科急性期ケアに従事。
1991年、聖路加看護大学大学院修士課程修了。1997年、Univ. New Castle upon Tyne(UK)、地域精神科ケアユニット客員フェロー。1998年、東京大学大学院医学系研究科博士課程修了。博士(保健学)。東京都精神医学総合研究所主任研究員、東京大学医学系研究科助教授を経て、2004～22年、聖路加国際大学大学院教授。2016～22年、聖路加国際病院訪問看護ステーション兼務。2022年より現職。聖路加国際大学名誉教授。著書に「リカバリー・退院支援・地域連携のための—ストレングスマデル実践活用術」(医学書院)など。

推薦者 | 福井 トシ子 国際医療福祉大学大学院 副大学院長
久常 節子 元社団法人日本看護協会会長

弱音を吐けない、支援する人をケア

東日本大震災の余震が続く2011年4月。福島県いわき市で保健師たちは広域からのボランティア受け入れと被災者のケアに奔走していた。しかし絶対に弱音を吐かない。現地入りした萱間氏は、「保健師たちには強いプロ意識と公務員としての矜持があるが、相当のつらさがあるのでは」と感じたという。精神障がい者への支援をしてきた経験から、“支援する人を支援する”ことの必要性を強く認識する。

しばらくすると学生時代の後輩から連絡が入った。彼女の勤務する医大は、福島第一原発の近くの精神科病床がなくなった自治体で、心のケアチームのコーディネーターを継続していた。そこではサポート要員が足りていないという。萱間氏は、研究室スタッフや大学院生、修了生に協力を呼びかける。すると全国から、「やるのは当然」と手が挙がった。現地での仕事は心のケアチームの調整サポートで、それぞれの人が抱える、“今は行けない事情”を聞き続けることも予想を超えた重さだったという。大学院生に対しては指導教員としての責任もあり、原発



いわき市では心のケアチームの一員として活動。

の状況が刻々と変化する中、「今日はどうだった？」と話を傾けた。この時の“支援する人をケアする”経験は、コロナ禍でも活かされることになる。

恐怖と対峙する、看護職の心をケア

COVID-19の流行初期には、感染から身を守る防護具の不足が深刻化。防護具なしで未知のウイルスに対峙することは、看

護職に「見捨てられている」という強い孤独と恐怖をもたらした。日本看護協会では2020年5月より、看護職を対象にした相談窓口を開設。協会からの要請を受けて、萱間氏の研究室の教員・大学院生・修了生は相談業務を担当した。驚くほど多くの看護職から「看護師は捨て駒だ」という言葉が寄せられる。この状況は惨事ストレス^{*1}であり、心理的応急処置(PFA)^{*2}を用いた心のケアが必要だった。萱間氏は日本精神保健看護学会理事長として、社会貢献委員会メンバーと共に、PFAに基づきリモート支援のためのガイドラインを開発。厚生労働省研究班などでも活用された。

萱間氏が“支援する人を支援する”に至った背景には、精神障がい者への支援を臨床、研究、人材育成の面から積み重ねてきたことがある。大学卒業後に勤務した精神科病院の閉鎖病棟では、救急車で運ばれてくる精神障がい者のケアにあたった。博士課程在学中に渡英。地域ケアシステムに触れたことで、精神障がい者の地域生活の研究をスタート。そしてライフワークとなる、精神科訪問看護の効果を示す研究や、精神科訪問看護制度の基盤となる研究を手がけていく。

災害や惨事が多発する現代にあっては、精神科看護には、支援する人のメンタルヘルス支援にも役割が求められる。支援する対象は、精神障がいと診断された人やその地域生活にとどまらない。新興感染症等をはじめとした健康危機に対応するため、いかに看護人材を育成し、活動を支え、これまでの経験を活かしていくのか。精神科看護に向ける眼差しは、すでに次の未来を見据えている。



相談支援ガイドラインは、メール相談を担当する人々が、気持ちだけで受け止めるのではなく、きちんとしたバックボーン(PFA)をもって支援にあたってほしいと短期間で作成された。

^{*1} 災害や事故、医療福祉等に従事する教員者において、特殊な活動下で生じるストレス。
^{*2} Psychological First Aid(サイコロジカル・ファーストエイド):大規模災害、事故などの直後に提供できる、心理的支援のマニュアルのこと。